

---

# 幸福な言葉遊び

由里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸福な言葉遊び

### 【コード】

N8382X

### 【作者名】

由里

### 【あらすじ】

ある殺人犯の死後のお話。

「ようこそ、ここは『天国』です」

死後、彼が案内された場所は何故か『天国』であった。

殺人犯である彼死に様は実に呆気ないものだった。赤信号を無視して横断歩道を渡っていた時に、トラックが突っ込んできてそのまま即死だった。

しかし、呆気なく彼が死んだというニュースは国内中に伝わった。何せ彼は連続殺人犯で指名手配されていたからだ。殺害人数は確認されているだけでも一五人。国内未曾有の快樂殺人犯だった。もはや、殺人犯というより殺人鬼という表現の方が正しい。

彼が連続殺人犯だと発覚したのは、彼が勤めている運送会社の上司からの通報があったからだ。殺人が起こったのは全て彼が荷物を運送した県であった。そして、普段の彼の言動を怪しんだ結果である。

彼は同じ県では二度と殺人を行わず、手口や対象を変えることで同一犯だと感じさせないようにしていた。

そして警察が彼に任意同行を求めると逃走をしたために指名手配、そのまま行方不明になっていた。

警察が彼の家を調べると、タンスの中に写真が一人の犠牲につき二十五枚保存されていた。そして、その裏には殺人の様子や感想が事細かに書いてあった。

毒殺、絞殺、刺殺、銃殺、撲殺、圧殺……全て異なっていた。

「さて、殺人鬼がどうして死んだあと『天国』にいるのだろうか？

その答えは彼自身も全くわからなかった。一応、快樂殺人犯の自覚がある彼は、天国にいけるはずがないのだと思っていたからだ。

「俺は何故天国にいるんだ？」

疑問に思った彼は『天国』に案内してくれた女性に尋ねた。すると、彼女は聖母のように慈愛の満ちた微笑みを浮かべて答える。

「あなたは生前、殺人を犯しました。しかし、それはあなた自身が悪いわけではないのです。あなたはただ、悪魔に取り憑かれているのですよ」

断言するかのようにはつきりとした声に、彼は直ぐに「成る程」と納得した。彼はよく「次はこんな手口で殺人をしろ」そんな風に誰かから頭の中から命令されていた気がしたのだ。

「なら、俺はこれから天国で暮らせるんだな？」

彼は嬉々とした表情、声で言った。それはまさに殺人を犯す時の残忍な顔だった。

「ええ、それではこれからあなたが住む家に案内します」

天国にも家があるのだと、彼はそんなことを思った。そして、新しい「家」に着くまで暇になった彼はふと、案内してくれている女

性の姿を見ることにした。

瞳を見れば吸い込まれてしまいそうな黒。鼻は小さく、唇は薔薇の蕾を思わせる。衣服の隙間から覗く肌の白さや滑らかさは完成された白磁器のようだ。腰ほどまである金色の髪は光に照らされ、眩しく輝き神秘的であった。

「それは、天使。いや、女神だ。」

何者にも侵し難い神秘的なものがある。だがそれ故に彼の頭の中にいる『悪魔』は囁く。神聖なる彼女を殺せと。蹂躪し征服する至上の悦びを味わえと。苦しみ、命乞いする彼女の姿が見ると。それに毒された彼はどうやって彼女を支配するかを考え始めた。

「ここですよ」

数分程歩いて辿り着いたのは、青い塗装が剥げたますばらしく小さな家だった。これは自分を閉じ込める檻ではないか、と彼は思った。

「ここが？」

あまりの酷さに彼は瞬きを繰り返しながら聞いた。

「ええ、見た目は古いですが、中はしっかりとしています」

天国に古いや新しいはあるのかと、彼はどうでもよいことを考える。

女性は鍵を開け家の中に入る。彼も彼女に続いて中に入ることにした。

汚らしい外見とは反対に中は確かに綺麗だった。壁は白く、床に

埃は一つとして落ちていない。

リビングらしき部屋に入ると、中心には丸いテーブルがあり、たった今もぎ取られたように瑞々しい果物がいくつか置いてあった。

「それでは私は戻ります」

「ああ、ありがとう」

女性は彼に言うつと直ぐに出ていこうとした。彼は不味いと思った。今帰られたら彼女ともう会えないのではないかと。

そうしたら彼女を殺す機会がなくなってしまう。

だから『彼女の腕を掴め』彼の頭の中はそんな命令する。それに従い、彼は即座に腕を伸ばした。しかし、彼の指が彼女の肌が届くことはなかった。

何故なら、彼女は消えたのだ。それは蜃気楼のように、近づいたら消えたのだ。

「ちくしょう、もう少しだったのに」

彼は悪態を吐き、舌打ちを一つした。

ぼつつと、意味の無い時間が流れた。

彼は退屈を覚え、外を見ることにした。彼女の姿が見えないかと思っただのだ。

そして、窓の外を見た瞬間に息をのんだ。

そこには・・・幸せがあった。

元気に走り回る子供、それを優しく見守る母親。

ベンチに座り読書をする若者、その隣には同じく読書をする少女。地面にレジャーシートを広げ、サンドイッチを食べている家族。彼らに共通しているのは、幸せに満ちた笑顔をしていて、誰も独りではないということ。

・ ・ ・そして、彼らの顔全てに見覚えがあった。

何故なら、彼が殺した者たちの顔だったから。

走り回る子供と母親は撲殺。

読書する若い男性は刺殺、少女は絞殺。

家族は縄で縛った後にガソリンを撒き家ごと火をつけた。

彼は鮮明に覚えている。

怯えの悲鳴を、死の瞬間の泣き崩れ、絶望した表情を。

だが、目の前にいる彼らの表情、動作、雰囲気、その全てに溢れるのは何でもないありふれた幸せ。それはどんなものにも勝っていた。

彼が欲しくてたまらなかったもの、彼が欲しくても手に入らなかったもの。

・ ・ ・全てが目の前にあったのだ。

羨んで壊した全てが、壊せば壊すほどに遠のいた幸せが。

いつの間にかに彼は大粒の涙を流していた。それは喜びではなく  
慟哭の雫。

「俺は、ここで償えるのだろうか？」

後悔の念が言葉になっていた。

彼はついさつきまで、案内してくれた女性をどうやって手に入れるか、殺そうかと考えていたのに、今はそんなことを思っていないかった。思えなかった。

彼は今更になって彼自身が犯してきた罪を悔いている。自分が今まで殺してきた人たちには大切な家族がいて、目の前の光景が当たり前だったのだと。

しかし、自分がしたことは、幸せとは対極、不幸の底に突き落とされたのだ。ただ自分だけの馬鹿な欲望の為に、手に入らない妬みに――殺したのだ。

『天国』にきて初めて、彼は慈愛を知った。慈愛を知ると、彼は己の罪を自覚した。

窓の向こう側の幸福を見て彼は思う、罪は償うべきだと。自己満足にしかないのかもしれないが、これからはここで自分が殺した人に懺悔をすると。

彼は両手を胸の前で組み、頭を垂らし、祈りを捧げる。遺族に対しての懺悔と、自分が殺した目の前の人達に対し、せめて、せめてこの『天国』では幸せに生きて欲しいと。  
身勝手だが、心からの祈りを……

ここは『天国』

咎人が懺悔する天上の獄。

そう、ここは - - 天獄。

(後書き)

ありがとうございました。

感想、批判、批評などは是非是非お願い致します。

この作品は私のサイトに掲載したのを加筆修正したものです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8382x/>

---

幸福な言葉遊び

2011年11月13日17時10分発行